錦の魚後編　上

百卅六番二 [illegible]
にしきの [illegible]

へ 13
2900
4

大

紙の魚以第二輯の端書

[illegible]熊ヽ五美雨ヽ為生眠無蜂蜜

ヽ亦無尾文無蚊蚤ヽ利嘴幸屯

人ヽ思雄不為人ヽ喜亦區満亦紋

乃括言ふり。毛のまの青瑰ハ大立也[illegible]

刺[illegible]やり[illegible]や[illegible]

青池音ヽ是亦以ちてよめの眠[illegible]

門 へ 13
號 2900
巻 4

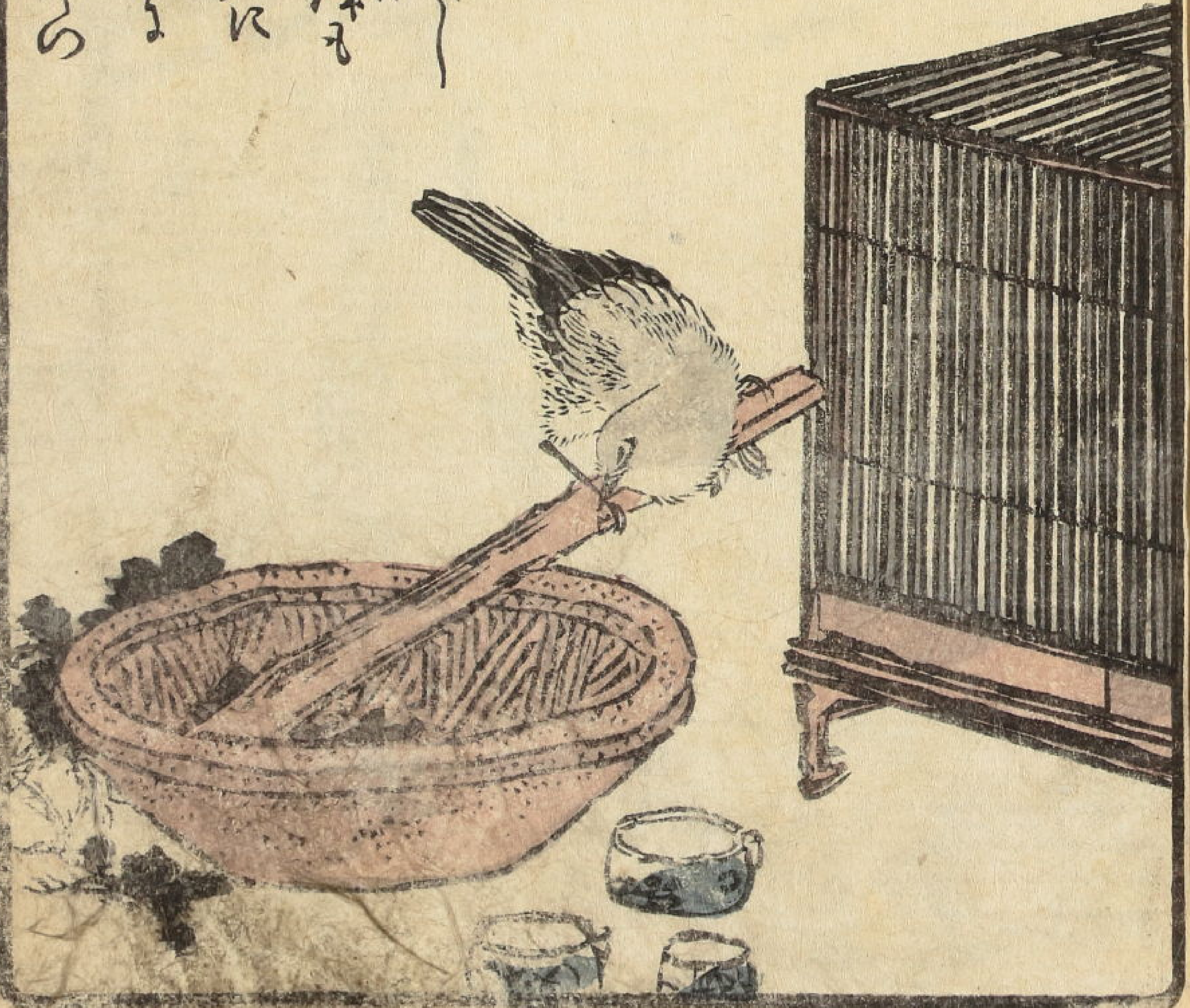
昭和九年[illegible]月五日
購求

費し。損徳をも弁へして。其益ある所を知べし
ば。毒尾なく利益なくして。人の害あらざる
ば。人の害となるべきは。此人の喜と為ざるや
抑相手ある人の喜をなして。恩ある人を害
を弁ふの旨趣ありといへども。一勤すれば嫌
世事の親も世俗に害あらんとは。予め是に
以て身を害ひ。一身を嫌ふの事すぐ納得と

といへども是不可なるにぞ。其の応報を明かにし。
まゝ恐れ勧善の一助となりし。懲悪
の一端となるべし。美婦は凶のもとゐ
なきく。応報の理を明さば。毒尾あり
利益あるとも。他を害の識をも免かれん
只管世人の観を歴し。婦人女子の心を計り
て。其様を描きて。縁する様あり。之を附して

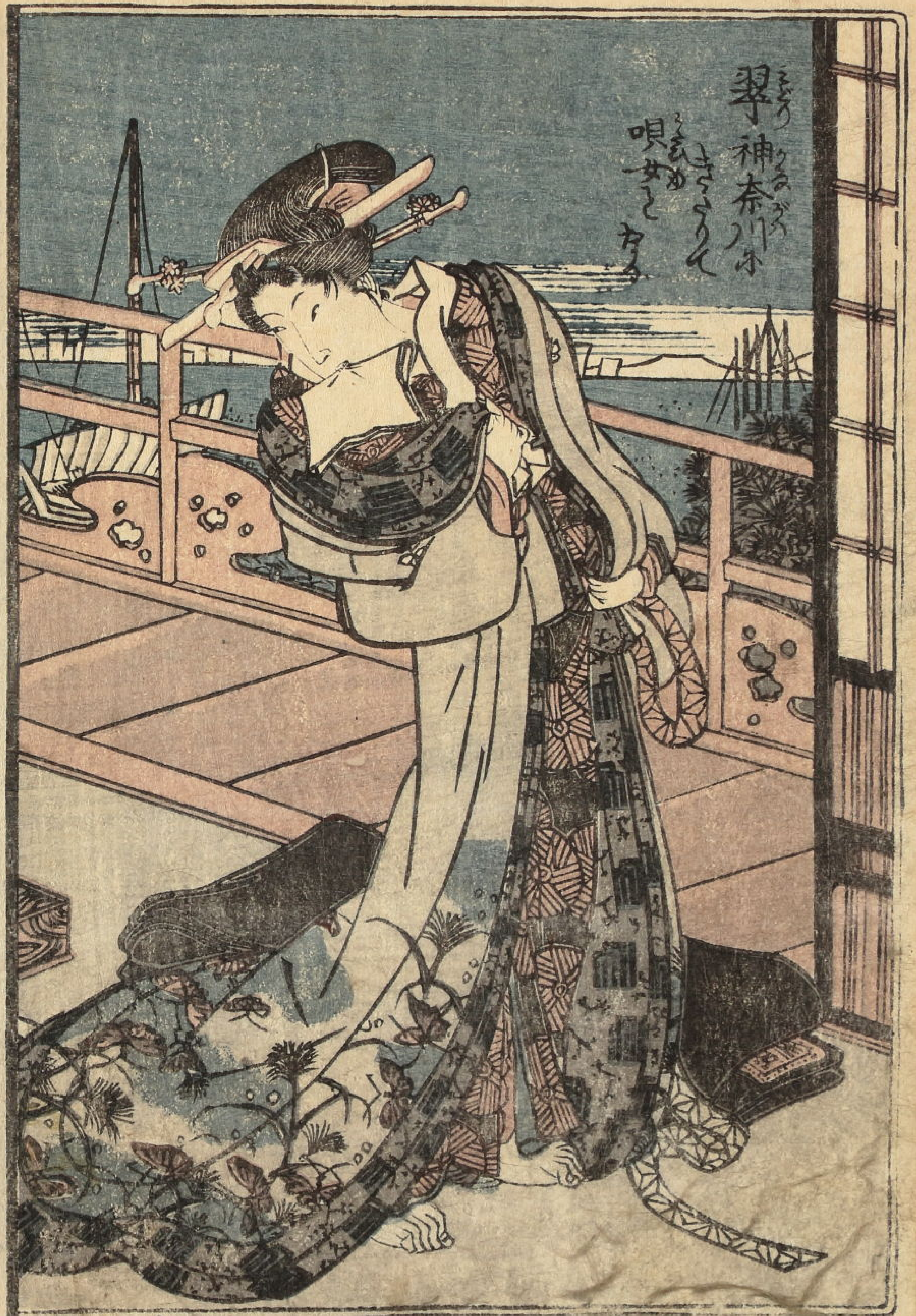
その写紙渋をさせぬ丸写なり。渋人とすれば
墨いとて。其の諸順に中ふれば。中しるしたる
手書通じ慰バ太ふことかすまで必ず小紫
あらんや。豈意時の利を慾ひて。当世の利を忘
るんや。其官偏に一生所に眼をつけて投
かんと依をきすてんや。

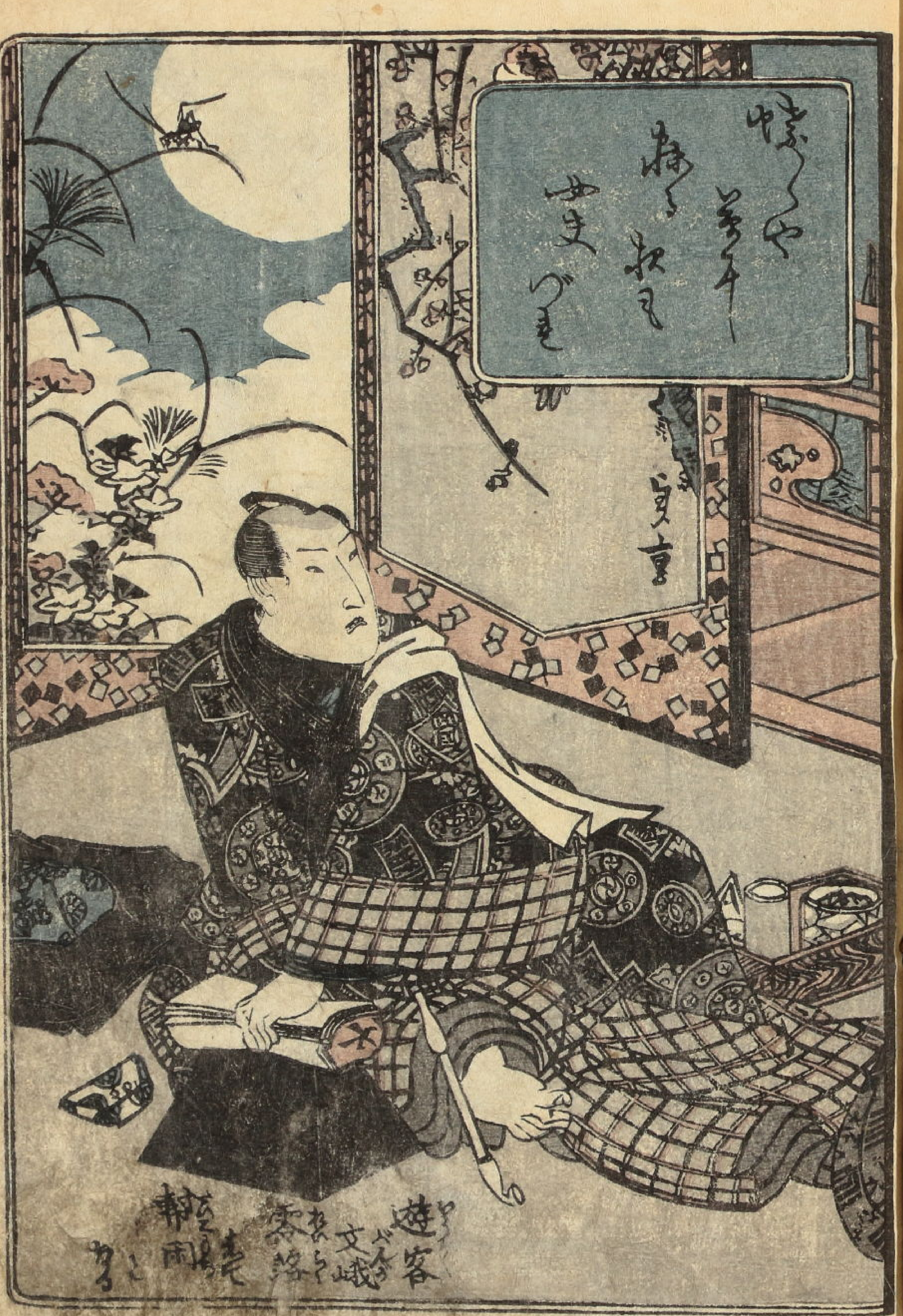
松亭の主人けまとて

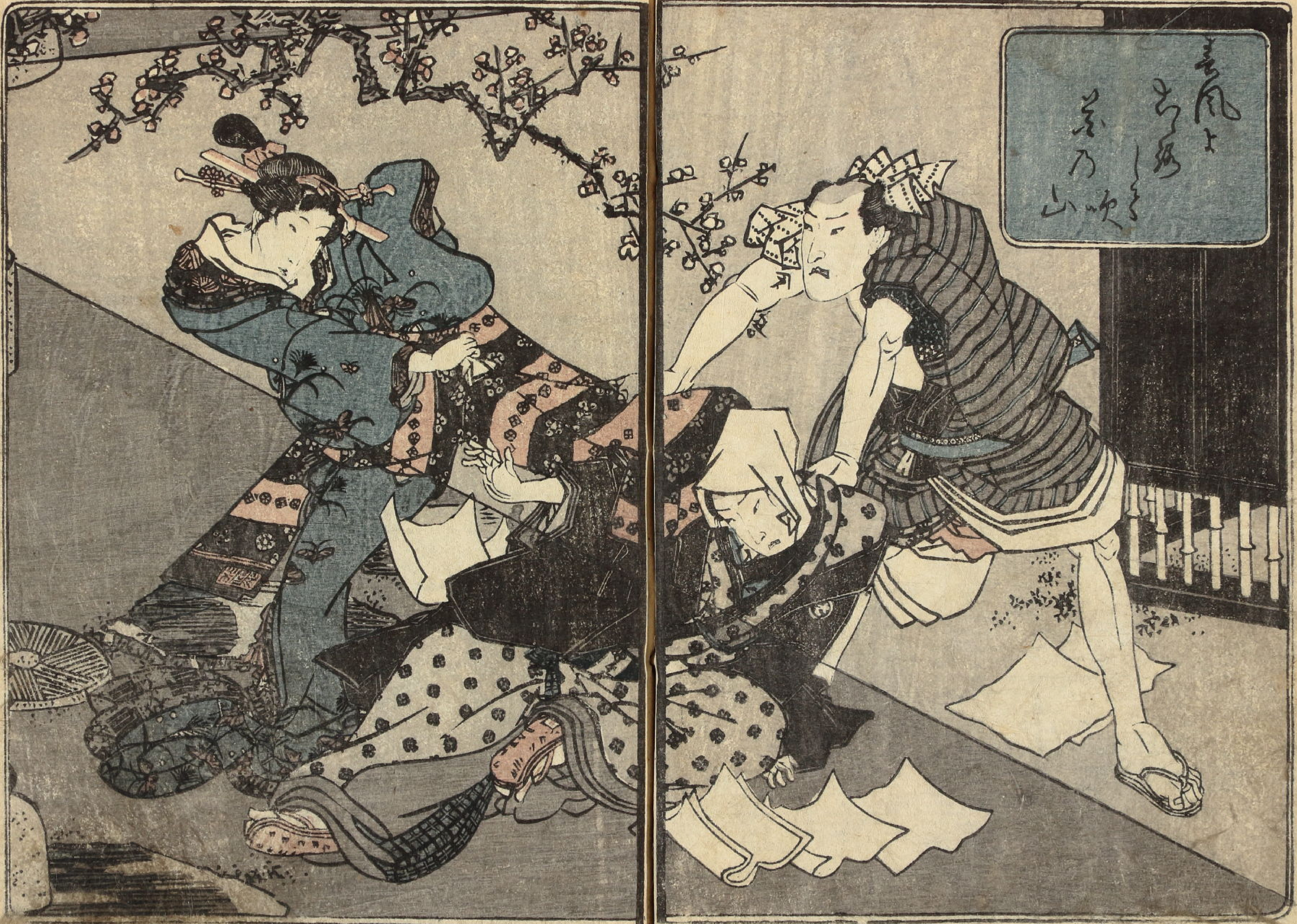


おもへども　雀の　おもふ紙
こゝに米なく
そぶれる　かなしく
かなしき　こゝろを

この山さゝの如が嗜好おとく　その
あらはとをを
虫まで及ぶ漆人を忘れるほどし
楽の書紙往来の丹漆も
すぐ犯のものをしもあらに
筆しで　古今の画紙よ
これあらしを経しの


翠神奈川の
芸めきさりて
唄女となる


貞重
遊客
文峨
奈良路
軽業
両國

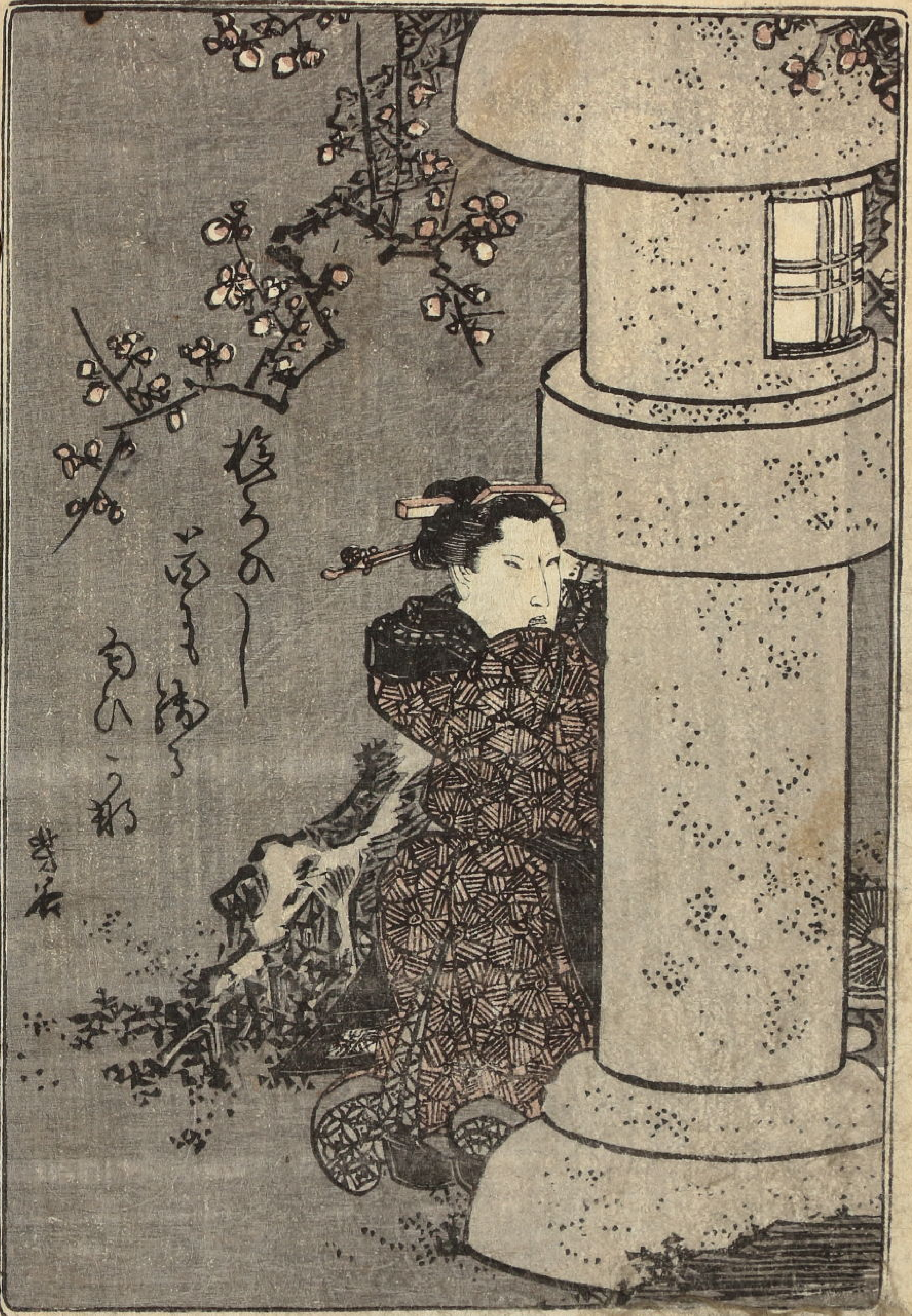

春風よ
ちら[illegible]
しらず吹
花乃山

風月（ふうげつ）花情（くわじやう）錦濵傳（きんびんでん）第二編（だいにへん）巻之上

東都　松亭金水編次

第四回

唐土（もろこし）の賢（かしこ）き人（ひと）老聃（らうたん）がことの葉に。国乱れて忠臣（ちうしん）あり。家（いへ）貧（まづ）しくして孝子（かうし）のみを顕（あらは）るとかや。さま千載（せんざい）を貫（つらぬ）くの[illegible]やらん。さるに小間物屋（こまものや）[illegible]平（へい）が身におよびし[illegible]など。纏綿の和におよびて史を償（つぐの）はんとするとき。[illegible]三両あまりの大金をなくしたりとうつたへたり。[illegible]娘と[illegible]の縁情（えんじやう）[illegible]金を


梅かのし
[illegible]まで誘ふ
宵ひこ月

かけて幕ひらく。縁は深めて二世までの。約束するまでまた探る
翠華が巻ぶりは。世にありがたき老婦女の亀鑑と。後の世にとぞ
賞もすもぞ。その身にありては艱難も沸るがどときの長き物語。
拙き筆にかき記さん。物語の場の景勢をみするぞか
爰にとりべし。物語は妹川老婆。浪花に一個の漢
まれ。年齢三十に近き身ながら。江の浦の細き扱揃え機の素綿に
縮業の。縁入をうけ。また商人なる職人なりしが。その
細とも呼び名。今は釈もなくすつと世をまとめ。本を知りて

婆「ヲヤお前か。ぶくは若旦那でござんすハイ妾部。よう入ツしやいの
ましたか」彼男の挨拶するまへ。挨拶を傍にあまき　男「どうしたら下
めそお目にかゝりました。おまへとその縁はるみサア妹川に孫まで
思ひ給ひて急に女児にを。おやしきへお出ましなされ
とのこと。それそのお金をへ。お出入をいふ手に六十とまでものござ。
やく束も家の主婦。彼女児に縁てより。世ろも洋渡する
思ひとぞ。探し入再四なるもあまたが。今後めそうなんなんぞ。
妹川が申すなり。お遠ざくの流縮金。三両まとそのあまり。

して女児を連て来ましたらしかしながら当家は。御先祖様より
表向で。お妾をお抱へ。なされた例がないゆゑ。殊更で許しの
無。お前様の御家の悪病気でも。出しては住居と厳しい御沙汰
そればかり。証文も私が頂いて把ますせう。さて御旅の都やさまし。
異な縁との縁でも。あなたさまどうか旗川様方へ入る主
あとの支度金をも手前親方の主の銀心もあるまいの。そこ
お前の親方御命をもらひ居ませんといふ畢ッて胴巻お置く。
御宿をお頼み申とまで申めて居ますを旗川の様をすゝめ 妹「マア内密

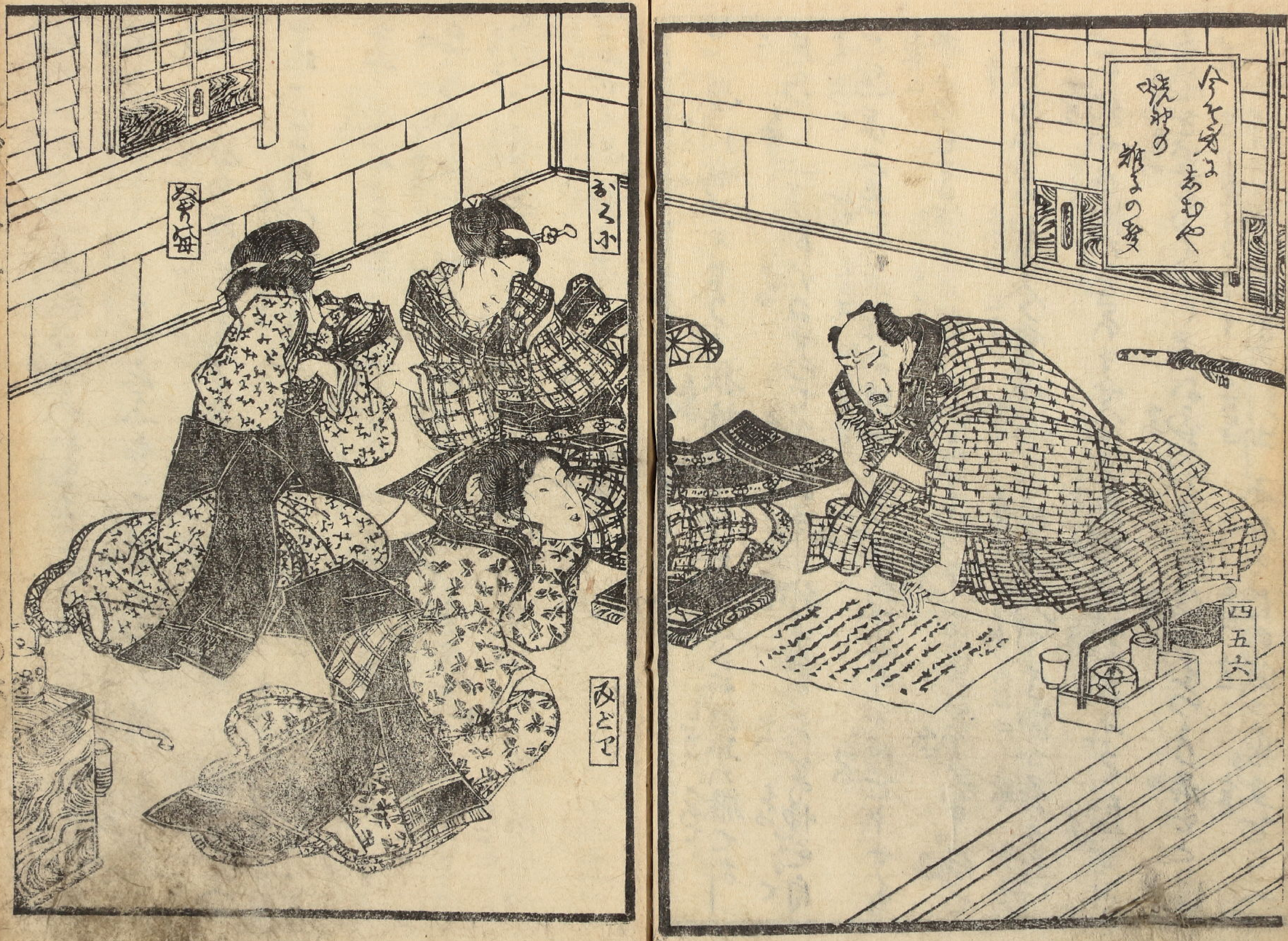
きんおかみさん世忰がなくては。御家名もあるまいさ。今
旦那のお気もみるお考へ。先のお屋しきのお名跡もおもてむきへ
あちやで。ほんぎでし女児一人を捨たあとの御家のたゝるが
ないが。御家をいふも金ゆゑの相続さ。まゝよそならア御
前のお屋敷さ。これあとの流石相続金をやる都合がさか
やせんアノし。どうぞ子嫁さん今のお嫁御さぶ。
親子母「旗さま。御家を入る子の父の狩にあるまい事の後々
云ても承知しませんうし。其で様子をまし其にお金を受

把てア児をおつことしやませうト云ながら母ハ瀾鉢と為ず顔
世間をうらみが勝と秀湯や。二疊ハおあるねども其
めぐるもあり沢不動滝竟の利剱のあるこそべ
しあるやと身を投伸て涯御つを翠の端ある血の滴を人さ
まきトと気を励まし。母か脊を撫りつ「慰めさん紀を
殺うとおしやさん私ゆうて君が御前の一人娘乃八。
慨まり焼くもあいけれど。なく抱さへ十五が爺父さんが自顔
宅へお通りが出来るとおもふべ然しくも給も是の生別とも

ぼんの。お気ハ気丈で居さしやる。縦令耆婆扁鵲が薬の。
果の果ハ及さうで。何れうして是ふのこと。いふるのか
ますまい。前日の病ハでござりまする。治方があるまいじやアござ
いませんト暁まで見ようも喰まで。母へのよく微ハ宜湯と
回答もうた待き。膳ハおのげハ酒をあげ。やるくておそ
母へ「あんまた抱てウモウく泣まのと思ふけれど
あそんで。顔てあげるこの年月世間でもよくいふ事り。自己の
年が早く早く児供を大きくしてそうして

しまひしに甲斐もなく他人まかせの介抱もなへが。暑さ寒さのわくろへ傷青絵でもあるまいが。丈夫さへ快からねば生別をあのよへて人の老寿命が長かろうと明らめやうが。今生に見せずともお立でもまだ悔しいトまた嘆くるをじやおさへが。移して果しと思ふ思や忽地に眼をもみこし「ヤイ悪党。するがど女の仇ぞよ。是程もあつろと先刻から。眼を眠つて居れど癪のつまり。られへ操をじやど殺すがいゝべ。最おりにえやせんとはまだ女とすがまゝ把りの高あつろ。彼等にすまへ候御難。

サア娘川ゆゑやせうト小指引さげ手にかゝれば。胴華は膝でおし留め「マアお待なすつてやさいまし。他さんの事を嘆くも愧ながら。自まへ已に勝手ならず愚ち表ゞお聞き若しうござりますが。何をかくすも母子のコレコレツイ先執しいかゞ。元見たまゝ言こそゞござります。縁でてお家もたゞさる訳。今宵に迫つて金子の入用。生師が余々兵他に手段へございません。サア是母さんはお身ふくお死ぬく元抱を生とも云はぬくコウおかゝや。お前も涙で曇つて居ますと。遠柄の硯箱用筆筒の引出に西の内の紙が東。丈をこそへ


今そ身は　おもや
焼物の
雑まの妻
おろふ
若梅
みどり
四五六

おそくお出ョ　娘「旦那マアよくお出なさいまし。此児が名も撰で
彼まうらすろう　ばゞ「兄まだ今年このごろ。私も彼は好かねへが。
兄彼まり分らねへ。慈母がつらふッツイ彼が悪い云めのでこゝろ深く考へ
アヤアたとへも人情を理らねへ。ハテ手跡ばかりよく見極子「極
ますもドヤアござりません。浄文は何と書まして宜しいかの筆を
字内案文をお附なすってやさいまし　ばゞ「案文をつけさあがずる
書人ぶ困るござりす。十三私が馬にまやせうぞ。爺父さんの宗旨
慈母と妹嬢と書人は不調法の元から。娘川もに入の机帳を書きやア

すうねへぜ　娘「ハイく何ぞむづかしいのでござりますね　四五「イヤ
嫁婿も似合ねへ手やア商売でござりよくよく稽古して来な下
お玉が習書硯箱と紙をおあげなさるくと浄文を書や
ばゞ「サア手跡ござ左人よく出来せへ別に読経こけれはねへお書なさい
あげさるへ。たとへ何程いへろうがあっても。一世観音弁才の面鏡
いましますわへサ。支那で流儀合の三右衛門とまんざらくなんでもなし
ことの本申ご　母「よろしうござりますが。私も手がらに宿ぐの中箱を
ばゞ「サアでへ如何私が弁当　母「私どもは不調法机を　ばゞ「私を

主でいなトかの證文を其処へおけバ。血をそゝぎめ朋輩お妻。縁川
老婢も見咎すれバ。しどろ六八老納め。さて網巻より三宿おどり
出て其処へ並べ「サア改めて請取なせへ。其処で縁川先祖
きう云ふ仕様や八分取れし。太夫さ モウ帰りますぜらうト揚
て夜の方へ立出て見れバ。橋本八門の口待そさびしき容みるぞバ
縁「ヨウ仕様なさん待遠さうな。サアく お出なさいト
捨て奥へ来れバ しどろ六八朋輩を引て「宿へ見ゆる宿が待てゐらう。
堂ともそ早く出なさいト いそいで覚悟ある身も今がらの森の

見あまりど。おもへバ涙も声びて平り。むせかへるくと泣きぬ。
意まやかせあけもども。ぞをを歎くべきまず母が。不孝の歎
見るも嫌く。へあるせんも恥かしけれど。母子の劉を伸くに
簾めて縁の果べきうらべ。それや覚悟をバ極めし身の。命まで
なくて歎くとも。互に治うの手事まとへど。心裡に沈吟して
お婆あ母さん。定もなさく涙堂平さまと母ぢのみおおかたに邪を
し。爺父さんの罪の報ひ不慈でもあるへク。クモし間どれく
その上に遠でもあさ月日ぢやア兎人の心澄くしも水の

池笠もたまへが宜しやアまへハヽト糶立られてよく夫知悩まり哀しい子をむごうで。何が何抵中の髪現拍子の憚のうち容。気ぬけがしたとおもひすごし。彼金把て就布へ引出し母「それなら私ハ一足り。往て来まして帰るまで。流そ屋のうちまで。去なども確くあり。此あいをもまうしトおひ捨て門の口に出て兄を見ども與助金を粟把る女児の手。二重もつ連て往もなる。此ちかおかさめふまりうくと思へば跡へ気をひかれ。やく泣ずへ座本が。金調ハ以と抵掛して。良人を探食送らうぞと。

おの人でしても心歩き老人一足まち跡へ一足戻る悲歎の涙ハ呆ハいそ孫子を。弁さらう山子分弟そ。往方知ぬ心地して。見ろハ気も消え神親をず。立入て「コレ聞年や邪よつてまて悲歎と此らまうろハまてしまへが。私ハ何抵も繰返くって。須ハ度さへ見えかねど。マア夫方もよく考がへ。又兼金さへハ器量で。おのおもうけ以繻織の若患。まぞ切ならう姪つならうと亭主ハ居るけれど。ござへ因寃の自業。おひ知りまち生さあつ。金並出まぜんと行るハ必定。お抵してア子もがおあの

身を沈めさせたげが済ましてあるハ。爺父さんハ知つての通り。義理ぐるいの性悪女の智恵の浅さゆゑで。児を捨てこのやうな[illegible]つりて冤罪の自害を。僕のうさ晴らめと。都て此子もなさらうくと思へバ何枕もトいふ親を見んとすれども胸つまつて泪たげしき眼を拭ひ「アレまア私の悪るかつたお云ですハ。冤ハ晴てあるけれども。娘と女へお出あるう大きい命がありまさ。丈がつりが弥しきお舎弟まの人へお侍さまの。束許て貰ひまき渡園鋪を。つかふとりふも親のためとかくを私なるを

云ひくと些とも気を安くお出なさいト いはれて心を把直し。思ひ切て急に出る身が後の気兄弟ありまするで。翠ハ主をかり妹を「ア是で安心しました。其方の娘のゆくゑゆらち。私ハとくを出さ甘へト些ぬ大恩の罪か旨。妹をかまばこまります。此末何で涙で居る「それうう私ハモウ此うへおお親の子ハ身強ぬけ侍んどその身の。うへで忘れてお居でなのヨトなく捨て立あがる。跡が彼へ把捨る。妹ハ何と云言さへ泣より外のこともなし惣新華ハきのぐ術りや。門に出て来るうる。此僕乃奇をかつぎつと。おろ

其ハ四六懐より紙に畢まし金の数多少ハあらんど勝付ん

四「サア約束の礼金ぞ。ちら〳〵手に把がいゝぜ。アイ〳〵で安堵

しニトむつと息杖ふりかざず。宙を飛でぞ走りゆく

第五回

艶燭を掛並べて図様を眺めとれ。南献先生が花詩に

見りぞもく八ツ山の晩景ハ。むかし将門追討の貞盛が紀清ぞ

閑ぞ清栄の源蕃ぶ繋りけん。漁舟の大数へ冷く波を

焼灰の弦の声ハ夜山を渡ると一聯二句を続しけり。

その光景によく似たり。雲助うた「金がナア生。走け宝ヤアおヤエリ。

若党ハますますゑり金ハ光る一むねの気がのめるアエト唄ひ連て

ゆく向ふよりハ衆女来ると見え早打の乗物エイトウく

エイトウ〳〵と飛雲も先手もお供も総〆て人数十人ぞろり。

一挺の駕を宙に釣して。飛より早きも蓋合の歳時や

して飛ぶのハ。道中の力ありと諸家の徳を賞あり〳〵ことを

看て発明すべし。やがて夜も大や初更過ぎ二更とうとうが

振ひし。街ハ織ふ寂寞として。やや柔防その行燈掛け

喉より。沖の漁火も汐ふきに耗ど。たゞ騒がしきハ妓楼ろ子舎々。唄女が高調子。在郷の客ハ騒々しく客接を主て廊下へ出るハ。女郎妓女ありて狗ならず。福悪司しあの渡り殿方こそ遊ばせ婦るへと。お座敷の太鼓ハ。二階口の耳に響き。鈍りけて置くと。宿もるあり侘るあり。伴の窓のんその身にも逢来ッて邪魔をいとも法界あるべ。あまりに鏡に銀妓あり。艶て寝る客ハ娼妓の傀儡。下戸の愚強ハ苦界の絆なるべし。かく賑ひの下座

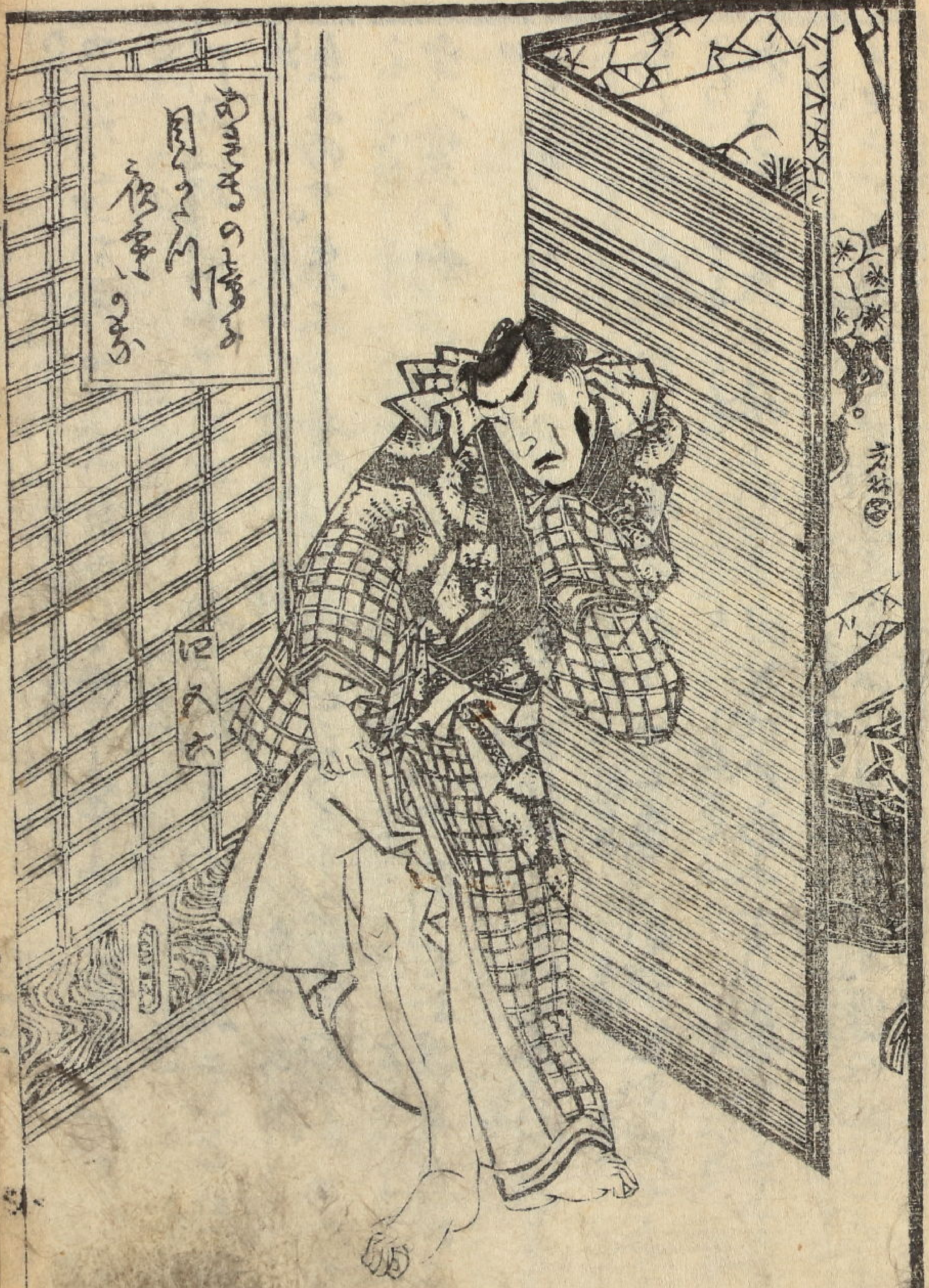
敷ハ。まことその[illegible]割にして。旅人ならぬ旅客を止ても旅店の懐ならバ。あるひハ女子連の江島詣。大師河原の月薬師中。あるひハ年々に往来する。旅商の望みなれバ。悪まりするハ浅黄客に。娼妓ハあげざれど。あの膝を抱てかすかるゝバ。もや更ゆる子一ツの鐘ハ上野か浅草で。東海禅林の山に響くと。世ハあのづゝ寂かに沖の鵆の聲幽に岸うつ波のおとさへも。風の夜来ハ静なり。帳ハとくの奥の間に。宵より一人寝させまゐらせて。たまさかなる女子が

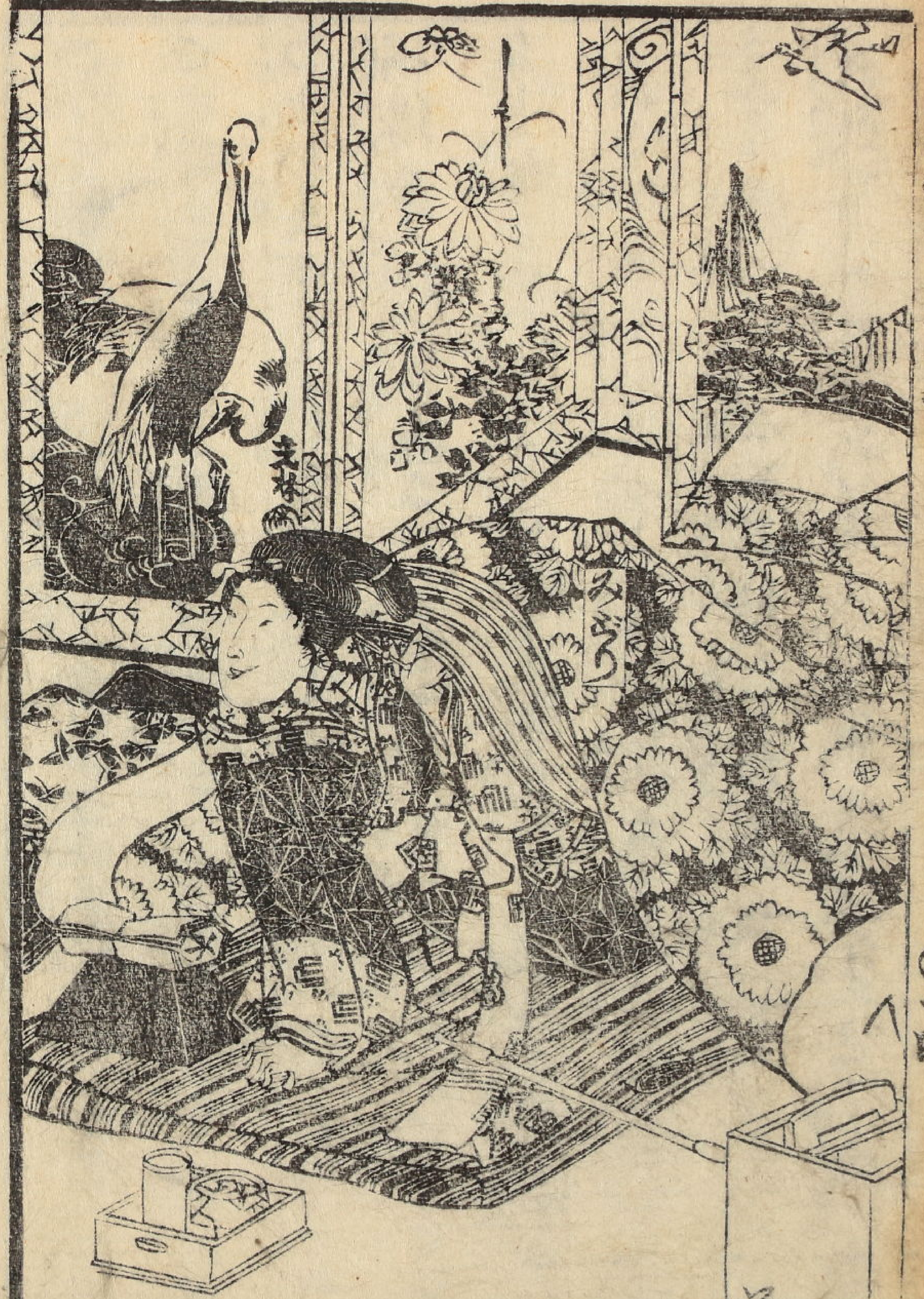
かゝるや。伏見の里乃あさましくも惜き別れを熟と思へばかなしき
身のなる果と只管歎きに沈ずまで。身も浮ぶなりの淵の
海底へ落んとすれど軀もあれぞ老の歎き妹の泣歎く眼の
まへに遁れて安らせ給ひまで閉へぞ。心嗜み可く　あのみなり。枕
よする蒲紙をさらりとあけて入る所へ。別合ふ何と云ふぞ六
あり。他の心もあらぬでや。独寛に暮くうち。兎角。鳥羽卒が待（しばし）
みまかば鳥羽卒はそのまゝ起あがらんと。する身を押へて眼ば
細くし　「コレサくな拵して　おまヨ。ザアとまらう私も寐るまぞ

お主嗜しなさる先刻からあちくツく尻からもぢくしと
けれどもその花瓶が長捨。それに酒を注らせて。アヽモウく
関りまする今夜は酒を過るとちや。アヽ生コの理屈だと思ふ
けれど先ほ行きずも打角の儀何をまゐらふ孫さいなと
わへうヽツイ過るさへ　「とぞ「夫なるお痛を待まするから。
何処へお寐のでござりますエ　「アレサ別に蒲団がある
及ずば。何処へ寝るとコリヤ貪慾。おまへと一床に枕をかはす
べて　「アレサ串銭を無約ますまで　「串銭ならば

わへ。丈夫だつたりで三百両や何ザ端金の。手鍋りにとさげう
甲斐。コウ細辞さんの仰にや何も隠ぺども実のあるのでござりやうナト
綢繆かくる繊の月蝕れ。あの人と見ゆる不寄く起ありつく
首を傾け「何様も何ご命やそぞやきの宝妻かり。
あげるとお言へ先刻のお金借りての旅度へ連て来られさ
始めから何様りに叙りと不測をられて。今におおがお出
なら喫て見やうと思つて居ると私と孫るのありりぐ三
百両とお言のへ。お節しきとの虚侭先張おおのお妾え

どうせ最初から他様の悪をあなたが覚悟。左様なされ
で宜など見ゝて親御も逢せないの。宗やお娘へのぐ
のとお言なさる。養母さんも別しての歎き。他様のものでお
相縁奇縁で。大造なお金を出して可愛がつてお呉の身の上
ある。私も親ゆへ様ぢやうござりますが。実ある彼の人の
なので何するも相縁で仕てお呉なさる。旦那さまの
ますト処女の似合ぬ理窟の縁ぞの挨拶
高慢らせしが恩地よ。丈まとうちつけ「ありがとうござい


あまそぎの俤を
見する門
夜雪のまつ
江文太
芳林


芳林
みどり

在理ずつぽおお方へ打明て咄しをしても宜けれど。アノ樣な川に窮ちやア途中ずつぬの沢ずら。其で故とと抜云のサ。為人も業ずて居るぞうろう。望は窓から女の宅へ実は新ぞと云てやらうヨ「抜抜てお呂ぞうろう縁に宜ぞそしてまアおかみさんの。宅へ何ぞぞどぞのまず。何でよくへ何知ぞ知ぞ。何商売で動くござ。美しい沢をお咲せなう。私きやア実に焼しのヨトおを。他の方へ為で。色その事うせその素性は稼業を姿さんと心に深ぬ眼もに

どうぞお方便術計。荒気よりして妻を見る。その悪らしきあどけなさの美しさで給のあど。他の方へで続くと致心としても思さへ見えぬむりりに見惚て。抱つかんとする嬢を帯か卯し「アレサおかあさんも母様がおの子へ。御教云へころのうち「何もころのおれへけども。手取も嫌しれまとめ南て毎の腕の転がって。学せやう。サア角でも贈くまつさ。酒に酔ちやア帰るより。純に楽しまれ下さるまがら。猿引うけてうち仲せんぶ。煙草も今の給方さく。銀お乳でも

夫ある身と縁く覚悟はして居ても。今さら情き妹と背の。結ぶ縁しを切り捨て。それも煩悩の人と迷ひなす心哀しさに。心で泣て表向では情夫の浮の初契。離れきさあらに覗待が。此の穴は十二分の銭を食て去りう客に。己も独りがたのしくてあるまゐ夜をまて明すう。曉迫くありぬべし。かくてその明烏も此の穴の縁屋城。今見えもせず日中も雨戸引きて閨の屋で手娯楽をなさう。と食事もすゝめさせて。時次が傍を片時も離さず。

時次郎は今朝より此の穴が素性城なんと探し。問ども故に今の地を名。一文の貰まで渡せず実は自己が妻にするあつて大金を出してこのおあの身を買切このよしぢやアねへのサ。実は自己の加賀川で。金沢屋といふ遊女楼へ。おあのとらの後家おぢそので。その後見なして居るが。一所の者どもが実の生娘がある。今は幾千でも出さうと探して遠くの情を知で諸方尋ね新たザテ十六七の[illegible]お[illegible]の表向を悦ばせ子とて[illegible]内縁は恩の[illegible]

窮屈なと云て綺麗の。娘ハ此方人の気に入らぬ。聞ツて拵さまき気儘におやの目を盗ミ。挨拶きはめてつれて来て。下女が勝手り愛しさに競逐ツておやを騙し。わりの情分にあつて見るが幾千の金になるとても。悔に無数しても見るのハ親の気をしても見れバ。内ハ代をかへ。おやを連て逃出アおれ自己ハ存ん外苦労苦患も。おやのまハ儘ヤしれんがおやへ大方気ざらあ。ト出で胴ハ惚りし「始ごとおやのきていし衣女にやぶ遠ツて。身が綿様ずと知とあいけへ。

ヲヤ気味の悪い物好さんでござりますト。やゝの老をえつかまへるが。やゝゐハうち殺。一今までゑる不孝な啼ぐわ。是までぎりハ不孝な事だ。次は他の金をもしも。顧つて見れバ自己が親の金を出してみろ。おやの難儀ハ自己が自由にして一ッとつて構ひれかね人が。今のよふな娘を殺りと云て大枚の金を出し。ひとの命あ。済ねへと云人ハ済ねへと言はバ丈夫ずらうが。明年の内で利分で物事ハある。地獄りでおのつらみ逆意で出ずおまへトいふの人の流中をするが。一旦この身を汚させ。丈に属て物ごとくらう。

然とも女の身今さら願ひかなはゞ今の難儀を救ひ上
するが。三石五の御家も同前。身まゝ主人に属奉公致さ
ねば縁者が有るも幸ひ。文よりその神奈川の金沢屋と云
云 然らば何様給ふ方もあらうかと心当りて荒木鍛冶一丈
身をば文が世話で宅へこの者は其太夫の側女房と言ふことを
宮の心が異らんは。旅後ハきつと有りそなもの。今迄ハ道
様への御と恋名をつけらるゝも。世間が鏡くあり。私も長崎
急ハ必定也抜ても中を引裂を手に頼まれまする。被
捨に成つる一時後悔しても後へは戻らんぞ。よく考へておみなさい下
いそれてしめさらち思ひ「さうなれどお前のいふ通りでござんす
まづ神奈川へ帰ッたうへでの一思案「アゝその方が一ばん宜い
兵「それなら鎌ちやアお前と自己と情合のあるのは従来で。
何処までも他人附合「アイ／＼それなら私ハヨト丈より
手紙をとり出て神奈川へと急ぎけり

錦の魚二編巻之上終